

とらうべ

悩める家庭科教師の心

浅野絹代

私立男子高等学校家庭科非常勤講師(埼玉県)

家庭科の教師になって3年目。現在男子校で1年生の「生活一般」を担当していますが、以前は女子校で国語科の教師をしていました。

家庭科は、裁縫・家事を中心とした女子教育の教科として出発した歴史がありますが、時代も家庭科も確実に変わってきています。高等学校においては、平成6年度より男女ともに同一教科書で学ぶ必修科目となりました。その内容が私が学んだものとは大きく変化したことに驚き、そして戸惑いを感じました。私が高校生だった当時は、家庭科で「性」について学んだことはなように記憶しています。

「生活一般」では、「青年期の生き方と保育」の分野で、家族計画と避妊を取り上げています。「青年期において望まない妊娠の結果、人工妊娠中絶が増えている。性行為には妊娠の可能性が含まれていることを認識し、こどもを育てる能力、条件が整わない時は避妊の意志決定をおこなう」というものであり、具体的な避妊の方法も述べられています。青年期には高校生も含まれるので、“避妊をすれば高校生でも性行為をしてもいい”と捉えることもでき、事実そういう質問も生徒から出てきます。もちろん「そういうことではない」と説明はしますが、多くの家庭科教師はどのように考えているのでしょうか。

男子学生は、好奇心の塊です。基礎体温法について説明をすれば、「生理の前と後、生理中ではいつが一番危険なのか」。ピルについては、私の説明不足もありましたが、「男が飲んでも効果はあるのか」と

いった思いもかけない質問が飛び出します。試験に避妊の方法を出題すれば、「中出ししない、外出しする」という答が必ず出てきます。膣外射精については授業で触れていないにもかかわらず、生徒たちはこういう言葉で知っているのです。妊娠の可能性が高いものなのに、“これが避妊の方法”だと思っているのです。

また、教師がどのように反応するかを見るためにか、「コンドームを使わないほうが気持ちがいい」などという過激な発言も出ます。これに関してはノーコメントですが、(財)日本性教育協会の「高3の性体験3人に1人」という調査結果を見ると、もしかしたら生徒自身が経験しているのではと、内心穏やかではありませんでした。母体保護統計によると、「10代の中絶が増加」という結果が出ています。これでは、学校教育で行なっている性教育が、何の役にも立っていないことになります。

生徒たちは性に関する情報を、アダルトビデオやコミックスで仕入れているのです。そのようなものから正しい知識が得られるはずがありません。性に関する情報が氾濫している状況だからこそ、性教育を充実させる必要があります。しかし、教えるほうに十分な知識がなければ、生徒たちに正しい知識を提供することは不可能です。

「性」と「生」に関して専門の助産婦さん、これからの性教育はどうあるべきか、悩める家庭科教師にお力をお貸しください。

